

高雄だより 臨時号

前期学校評価のまとめ

平成 26 年 9 月 25 日
京都市立高雄小学校
校長 出口 信行

公開URL <http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/data/111300/>
モバイルURL <http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index-i.php?id=111300>

学校教育目標

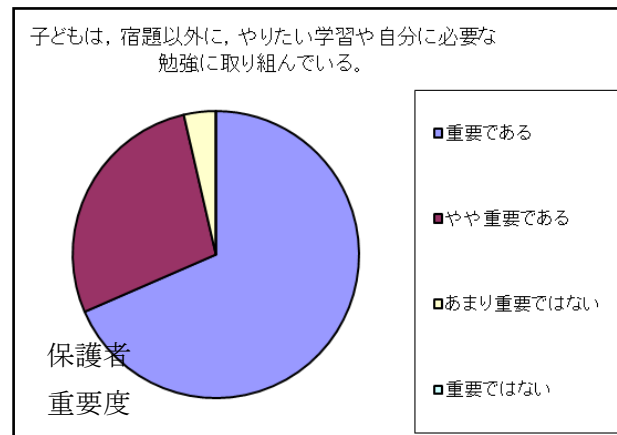
「心豊かに自ら学び 高雄の次代を拓く たくましい子ども」

はじめに

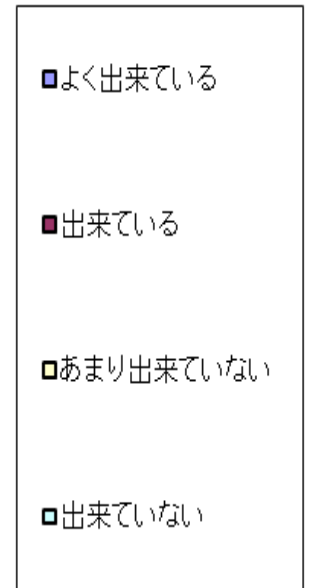
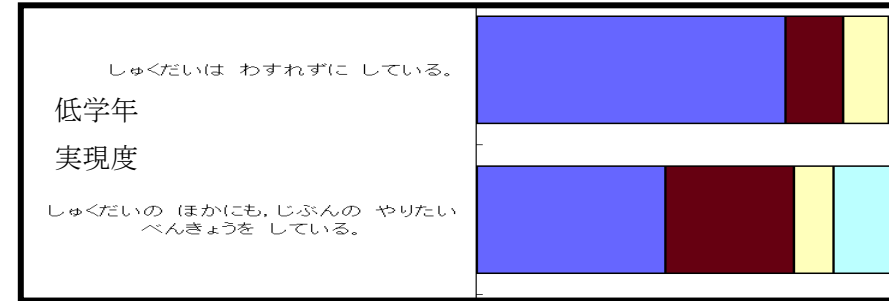
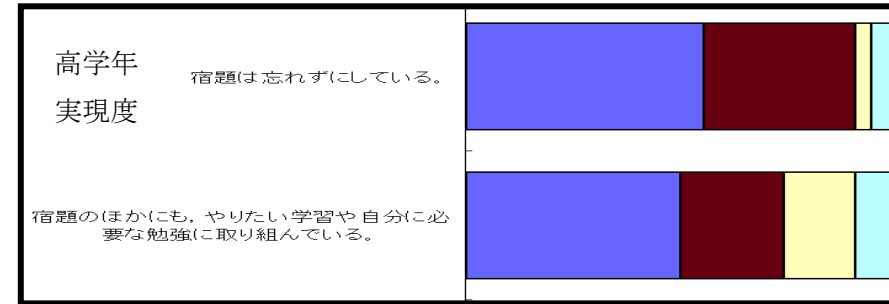
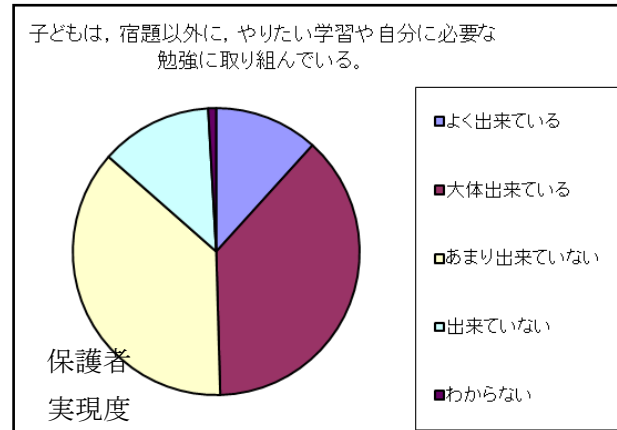
先日は、学校評価アンケートへのご協力ありがとうございました。子どもたちへのアンケート・保護者の皆様へのアンケート・教職員へのアンケートをもとに、私たちの取組やこれからの子育てについて、それぞれ目指す子ども像、目指す教師像、目指す学校像の視点から考えてみました。

① 家庭学習 予習し、進んで学習する子

家庭学習の様子について調べてみました。子どもたちの結果・保護者の結果ともに、宿題については「よくできている」「だいたいできている」という回答が多く見られます。ところが、「宿題以外にやりたい学習や自分に必要な学習に取り組んでいますか」と尋ねると、「重要である」と考えられる保護者が大半を占めるのに、保護者・子どもたちともに実現度は低くなり、保護者で「あまりできていない」「できていない」と答えられた方が 49 パーセント、子どもたちは低学年・高学年ともに 25 パーセントほどになっています。このことは、



はたして子どもたちが主体的に学習を進めているのかどうかを問い直す一つの指針となります。学校で「ドリルの○ページをやりなさい」「漢字をノートに○ページ書いてきなさい」といわれるとできるのですが、自分の良いところを伸ばすために何をしたらいいか、また、わかりにくいことを少なくするためにどうすればいいのか、それを解決する「学習の仕方」を身につけることが今とても大切なのだとあらためて考えさせられました。私たちは「調べなさい」「練習しなさい」「読みなさい」といいますが、それは具体的に何をどのようにするのか、子どもたちはわからずに戸惑っているのではないのでしょうか。「おなかが減っている人に魚をプレゼントするのはたやすいが、釣竿をわたして釣り方を教えなければ問題の根本解決にならない」と言われます。一定の知識や技能を身につけるために、宿題を確実にこなすことももちろん大切です。しかし、その子が大人に近づいたとき、「自分に必要な学習はなんだろう」「きっとこんな風にすれば調べられるに違いない」と考えて、問題解決に乗り出せるような力を身につけることも今求められているのではないのでしょうか。右の円グラフは高学年の予習の様子を示しています。目指す子供像に予習を掲げ、各学級で指導しているにもかかわらず、「できている」と答えている子は 56.6 パーセントにとどまっています。「学習の仕方をもっときちんと教えてほしい」という子どもたちの声であると受け止め、さらに取組を続けたいと思います。

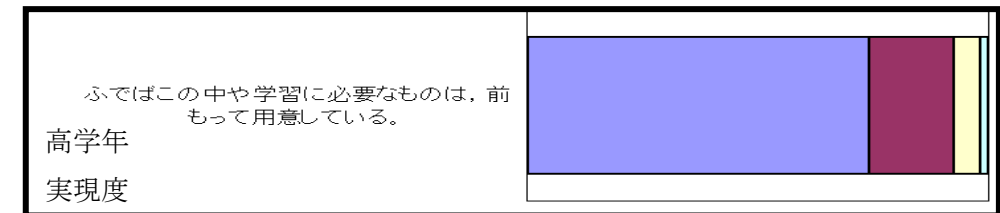


ふではこの中や学習に必要なものは、前もって用意している。

高学年 実現度

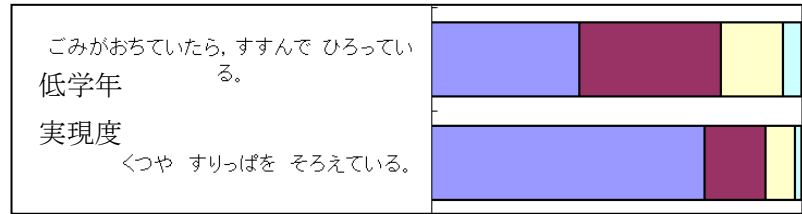
実現度	割合
よく出来ている	約 65%
出来ている	約 25%
あまり出来ていない	約 5%
出来ていない	約 5%

学習道具を大切に使用しているかどうかはじつは重要な視点で、学習道具を意識していることが学習に対する意識につながっていると見ることができます。整理整頓されていない机の上では学習意欲がわからないというのも同じ理由になります。鉛筆を一本一本で削って筆箱に入れるということを児童自身が自分でしなければならないのもそこに理由があります。右のグラフは、高学年のアンケートの結果ですが、92.6 パーセントの子どもたちが、家族の手を離れても学習の準備が自分でできるようになったことを示しています。このことは、自学自習の習慣化にとっても役立つことです。ご協力に感謝します。

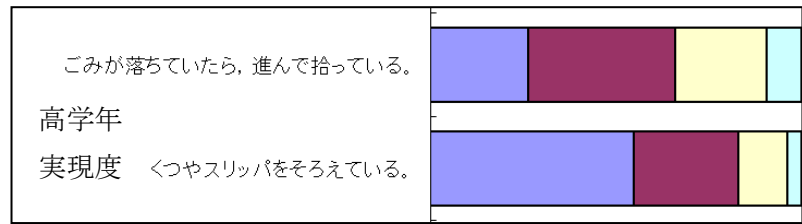


② 相手を思いやる気持ち コミュニケーションする力

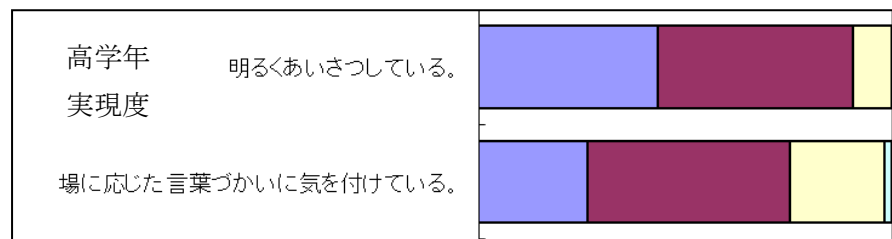
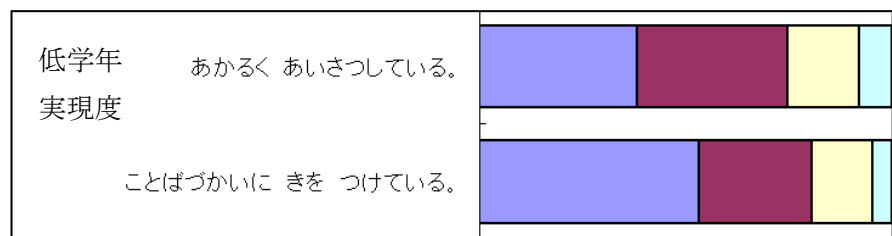
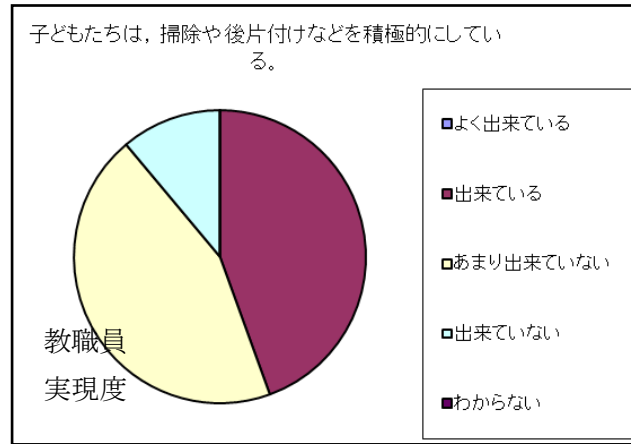
くつをそろえる子 明るくあいさつする子 「はい」と返事する子



私たちは、道徳の時間をはじめ様々な教科・領域で、道徳的実践力を培っています。そこで培われたやさしい心、思いやる心、生命や美しいものを大切にする心などが、生活の場面での実践に結びつくことを願って指導を続けています。くつをそろえる子は、そのような道徳的実践を示した一例です。「次の人のために揃えて



おきましょう」と指導することで、他の人を思いやることのみならず、そのようなことをしている自分が大好きになることにつながります。ほとんどの児童がくつをそろえていると答えており、意識していることがわかります。くつをそろえないというのは、故意にではなく、気持ちが遊びや活動の方へいってしまい、足元に注意が及ばないと考えられます。社会性を育むうえで、こうしたことに注意をうながすことは必要だと思います。教職員から見たとき、掃除や後片付けが「あまりできていない」という回答が 44.4 パーセントに上っています。これは、教職員の子どもたちへの思いの強さの表れとも言えます。100足のくつのうち90足のくつがきちんと並んでいても、残り10足が崩れていれば、「できていない」という印象を強く持っています。むしろ、教職員は「できる」



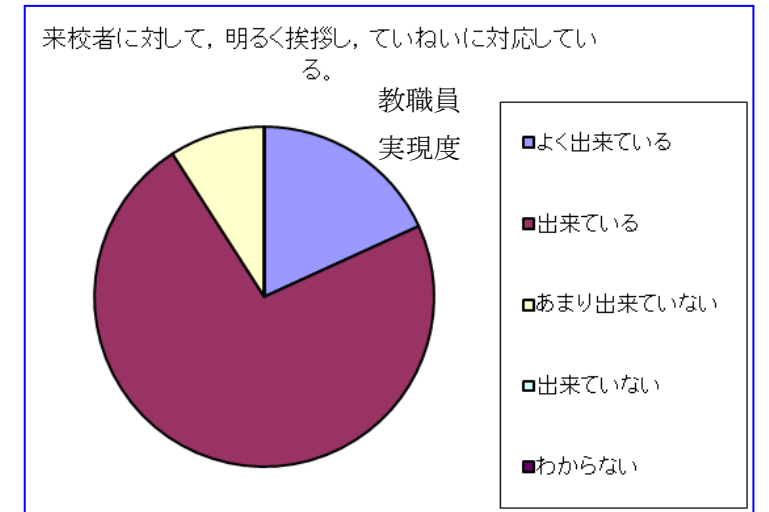
ようになったことを素直に喜び、それをほめることを優先させねばならないのだと考えます。

「明るくあいさつする子」「『はい』と返事する子」は、目の前の人に対するマナーとして日々大切に教えていることですが、マナーは、その日の気分や相手に対する感情に左右され

てしまいがちになります。

また、言葉遣いは、学級懇談会などでも話題に上ることがあります。友だちだから、つい言葉づかいに気をゆるめてしまい、傷つけてしまうということがあります。どんな時に相手が傷つき、どうい言葉でと思いやる心を大切にしてほしいところです。保護者や教職員からも、子どもの言葉遣いやあいさつは大変気になる項目に挙げていますが、言葉遣いはしつけとしてマナーとして、手本を示していかなければならないと思います。

今年度、私たちは、「子どもに範を示す教職員」を一つの目指す教職員像に掲げ、子どもと一緒にほうきを持って掃除をしたり、登校してきた子どもたちに元気よく挨拶する取組を続けてきました。その成果もあって、昨年度に比べ、自分から進んで掃除をしようとしたり、明るく挨拶を交わす子が増えてきました。しかしながら、右のグラフに示す通り、私たち自身が来校者に対して、「明るく挨拶し、ていね



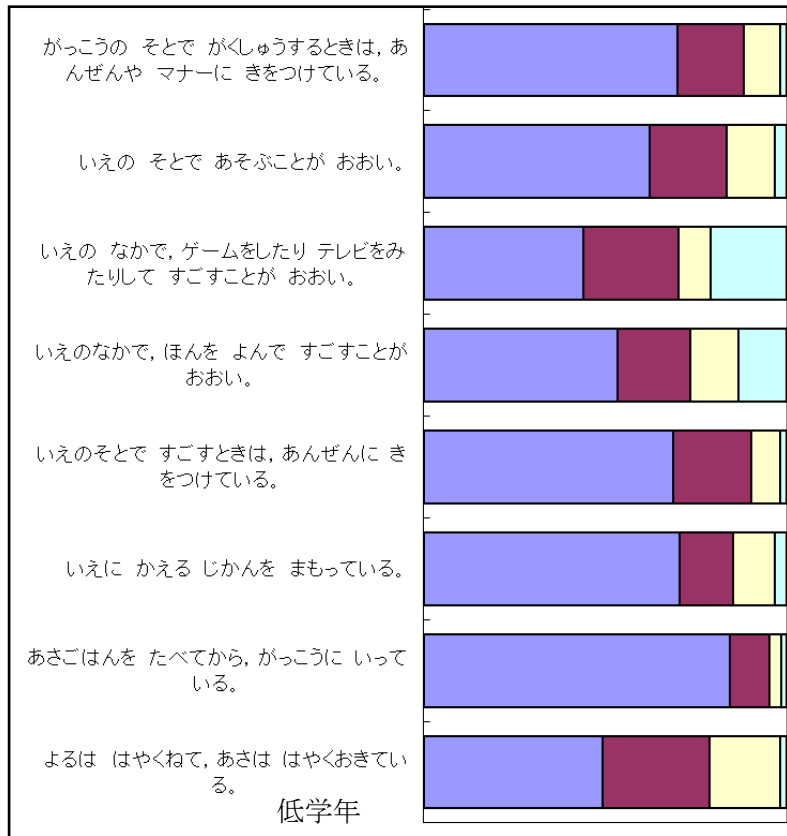
いに対応している」という項目について、ほぼ 100 パーセントの重要度を示しているにもかかわらず、自信を持って「よくできている」と答えているのが 18.2 パーセントにとどまっています。すべての教職員が「よくできている」と答えられたとき、なお一層明るく温かい雰囲気为学校が実現し、子どもたちの明るい挨拶も望ましい言葉遣いも増えていくのだろうと考えます。まず、私たちが自己を変革することで、子どもたちが変わっていくのだと考えます。

児童自身はあいさつや友だちに対する思いやりや公共心など意識していると自己評価していますが、保護者や教職員からは、児童の言動に対する評価が厳しいことがわかります。それと同時に、保護者のわが子への評価、家庭教育にたいする自己評価、教員の教育に対する自己評価もそれぞれに厳しいことがわかりました。この振り返りを次のステップにつなげたいと思います。このことから高雄小学校の教育が躍進する希望が見えます。

子どもは家庭で何をどのように学習したらよいのか、また、どうして学習するかと悩んでいないでしょうか。学習は「しなさい」と言われてもしないのにゲームは「してはいけない」と言われても子どもの心理には、「達成感」「充実感」の獲得の有無、「楽しさ」「面白さ」の違いがあります。学習が楽しいものになったら、子どもたちはもっと学習に積極的になるでしょう。

忙しい仕事から帰ってきて疲れがどっと出てくるときもあるかと思いますが、1日一回、子どもと正面に向きあい、子どもの学習に声をかけてあげることが子どもの学習意欲につながります。このことは学校でも同じことが言えます。

③ 自分を守る **身体をきたえ元気に活動する子** **安全に気を付けて行動する子**

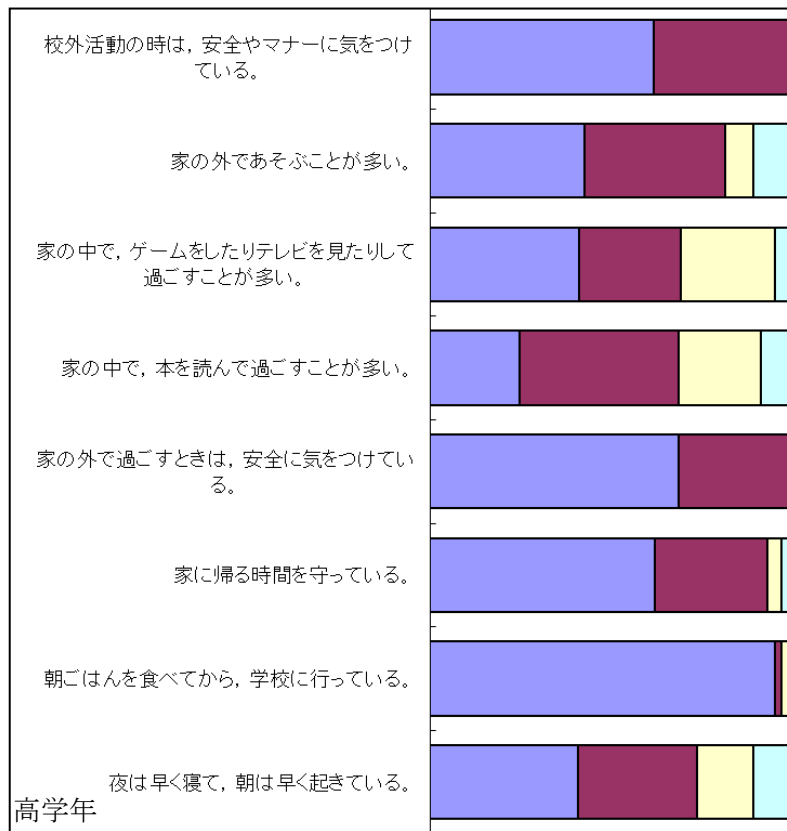


左の資料は、健康や安全に関する回答をグラフ化したものです。

交通量の多い国道が横断する校区だけに、「安全に気を付けている」という項目では、ほとんどの子どもたちが「よくできている」「できている」と回答しています。

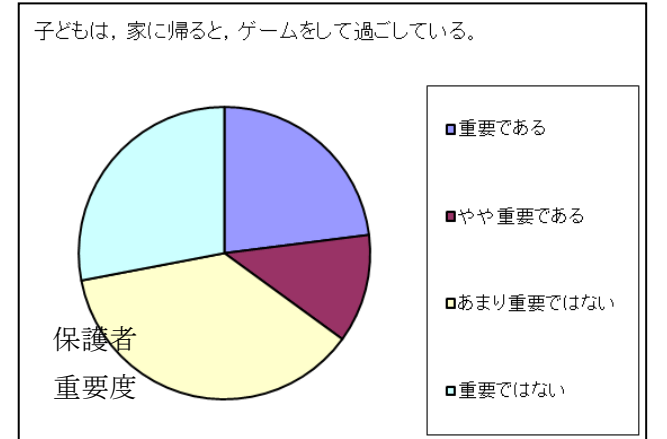
集団登校での見守りを始め、下校ボランティア・飛び出し坊やづくりなど、様々な場面で子どもたちの安全を守ってくださっている地域・家庭の取組が子どもたちに良い影響を与えていることがわかります。家庭でも、様々な場面で安全について話し合っていることも、この結果に結びついているのだと思います。朝、集団登校の様子を見ていると、高学年の子どもたちを中心に、みんな安全に登校しようとする様子が見られ大変うれしく思っています。

しかしながら、京北トンネルの開通などで国道の交通量が飛躍的に多くなっていることもまた事実ですし危険な運転をするドライバーがいることもまた現実です。子どもたちの安全を守るため、より一層のご協力をいただきますようお願いいたします。

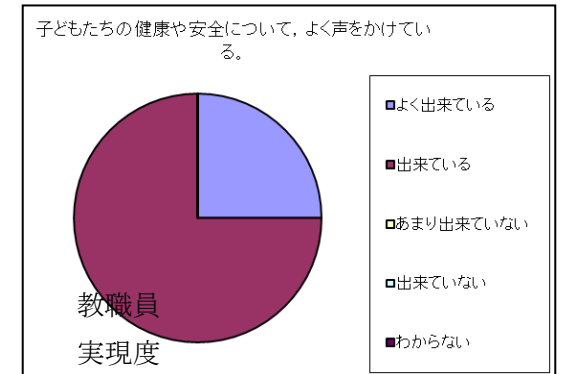


アンケート結果で、気になるのは「家の中でゲームをしたり、テレビを見たりして過ごすことが多い」「夜は早く寝て、朝は早く起きている」の二つの項目についての回答傾向です。

「家の中でゲームをしたり、テレビを見たりして過ごすことが多い」では、過度に家の中でゲームをしたり、テレビを見たりして過ごしている子が、低学年で70.2パーセント、高学年で67.8パーセントに上っています。下の資料は、家でゲームをして過ごすことについての、保護者から見た重要度を尋ねたものですが、「重要ではない」が28パーセント、「あまり重要ではない」が、37パーセントになっています。すなわち、保護者の皆さんは「家庭で過度にゲームをして過ごすこと」について、あまり好ましいとは考えていないにもかかわらず、その願いとは反対に、子どもたちはゲームやテレビで多くの時間を過ごしていることとなります。このことは、子どもたちの生活や社会の変化の影響と受け止めることができます。次から次へと新しいゲームソフトが開発され、通信機能を使えば知らない相手と対戦や対話ができるようになっています。コンピュータの操作の様子を見ていると、私たちよりもはるかに巧みに操作する子どもが見られるのは、そのためかもしれません。そういう利点も確かにあるのですが、考え直さなければならない点もたくさんあります。なかでも、子どものコミュニケーション力に関する問題が指摘されています。ボタン一つで通信できることは、よいことばかりではありません。「人間と人間が、うまくつながりあえなくなっている」「話し合いを通して相手のことを理解したり、自分の考えを伝えたりしにくくなっている」という声も聞かれます。私たち大人は、ゲームやコンピュータの長所も短所もよく理解したうえで、子どもたちの遊びの様子を見つめていく必要があるように思います。



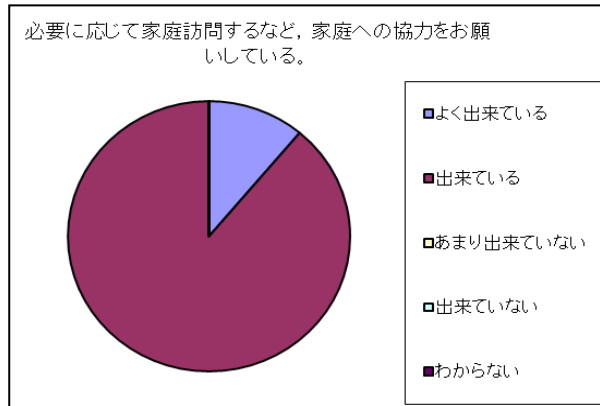
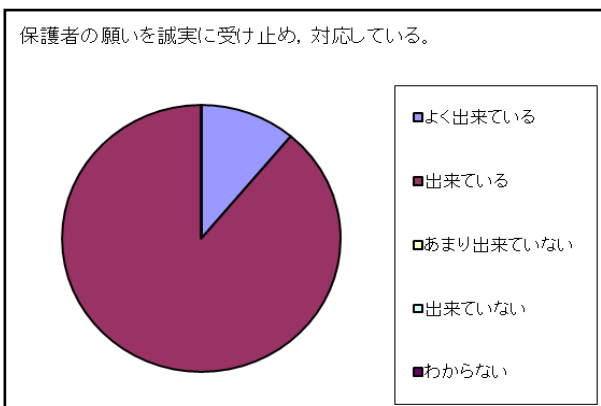
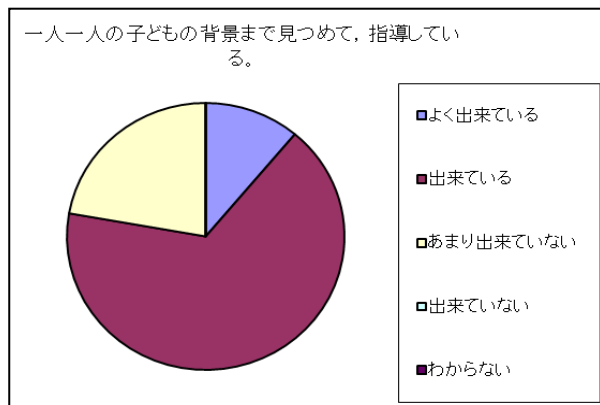
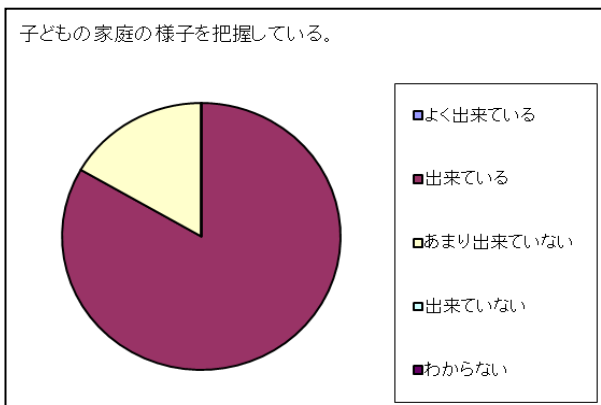
右の表は、教職員に対して行ったアンケート結果ですが、「子どもの健康安全についてよく声をかけている」職員の実態が見えます。「教師は医者にもならなければならない」とも言われますし、朝の健康観察を大切にしているのは、子どもたちの健康状態を把握して、よい状態で学習に向かうことができるようにしたいからです。子どもたちの顔色が優れない様子を見ると、声をかけて元気を取り戻してくれるように働きかけています。「夜は早く寝て、朝は早く起きている」について、低学年で21.3パーセント、高学年で26.9パーセントの子どもたちが「できていない」「あまりできていない」と回答することを考えたとき、私たちだけでなく、ご家庭でも子どもの生活リズムを整えていただくようご協力を求める必要があるように考えます。子どもが元気いっぱい学校で活動できますよう「早寝・早起き・朝ごはん」のご協力をお願いします。



④ 教師自身の自己評価（教職員実現度アンケートより）

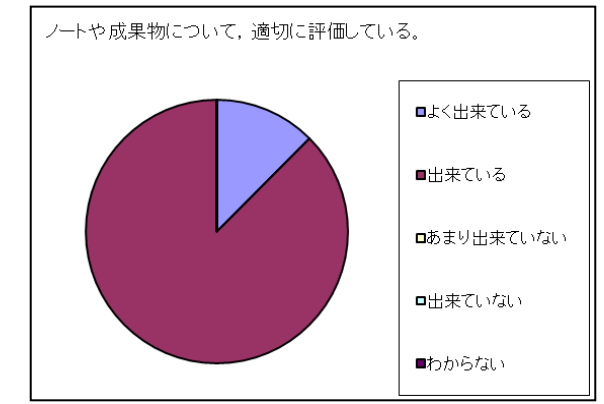
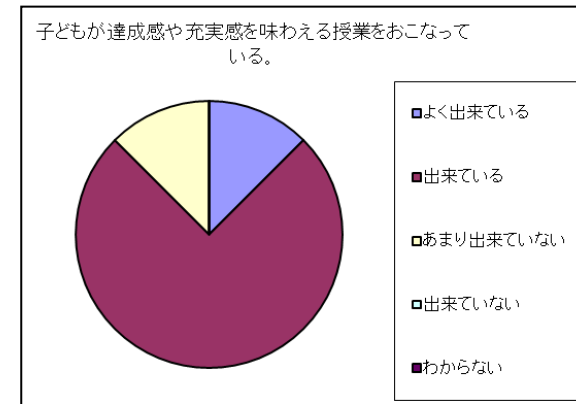
- <目指す教職員像>
- ① 教育に情熱をもって進む教職員
 - ② 子どもに範を示す教職員
 - ③ 専門の力量を高めるために努力する教職員
 - ④ 一人一人の子どもの背景まで見つめる教職員
 - ⑤ 公務員としての社会的立場を自覚して行動する教職員
 - ⑥ 組織の一員としての義務と責任を果たす教職員

学校経営方針に沿って、上記のような目指す教職員像に近づくことができているか、教職員の自己評価をしました。自己評価から普段の教職員の意識がよくうかがえました。



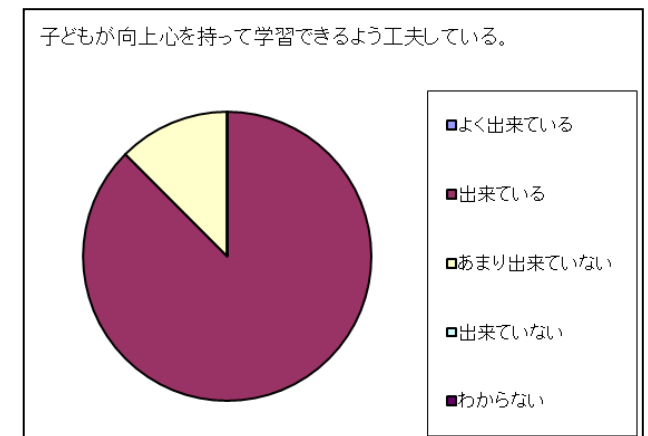
私たちの仕事は、まず子どもをよく理解することから始まります。子どもをよく理解するとは、単に子どもとの関わりを多くもつことだけにとどまるものではありません。気になる行動が見られたときに、「あの子はなぜそのような行動をするのだろうか」と背景まで見つめて指導することが大切になります。そこで大切なのは、家庭の様子を知り、家庭の願いを受け止め、家庭との連携の下で子育てすることです。上の資料は、その点についての自己評価をグラフ化したものです。「あまりできていない」と厳しく評価しているものもありますが、おおむね「出来ている」と評価している様子がうかがえます。しかしながら、ここで大切なのは「よくできている」と胸を張って評価できにくい状況が

うかがえることです。この四つの項目は、教師の基本として大切にしなければならないものです。重要度ではほぼ 100 パーセント近く「重要である」と評価しているだけに、「よくできている」が 10 パーセント程度にとどまっているのはさびしいことです。それは、教職員が「まだまだもっとこの子を知らねばならない」と受け止めることもできますが、家庭や地域とかかわりながら子どもを育てることについて不十分であると反省する必要もあるように思います。今年度、部活動や土曜学習・地域の行事などに教職員が積極的に参加したり、必要に応じて家庭訪問でお話ししようとしていたりするのは、教師自身の子どもの理解について自信を持って「よくできている」といえる教職員でありたいと願うからです。



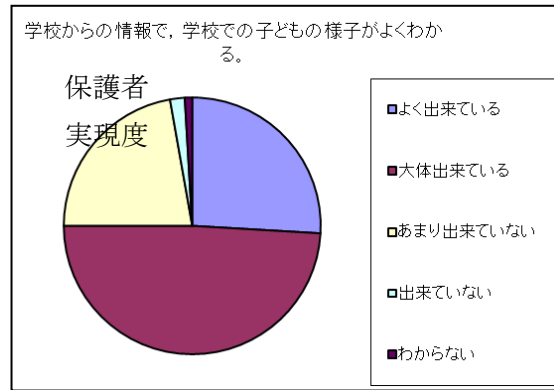
同様のことは、私たちの日々の授業についても言えます。専門の力量を高めるために…子どもが成就感をもち充実感をもつ授業づくりがたいせつなのですが、そうした授業の実現度についての自己評価は「よくできている」12.5 パーセント、「出来ている」75 パーセント「あまりできていない」12.5 パーセントになっています。「日常の忙しさから、十分な教材研究ができていない」と自己反省する教員の声も聴きました。ノートなどの成果物に対しての適切な評価も必要ですが、「よくできている」とはなかなか言いにくい状況があるようです。子どものノートの提出は毎回ありますが、それを一冊一冊見るために給食を食べないで丸付けをして、児童との対話の時間が失われるということもあるようです。

そうした現実から、今、学校も組織的に動き、一人の児童を一人の担任に任せ切るのではなく、複数の教職員が子ども一人一人に関わったり、行事の運営を担当を中心に協働・協力して進めたりすることが重要となっています。児童が取組を通して成就感や充実感を味わい、向上心を持って学習できるよう、情報を集め、専門知識と知恵を出し合ってより高度な取組を進める必要があるからです。しいて言うならば、一人一人の専門性を高める自己研鑽は今後ますます必要になってくることは間違いありません。

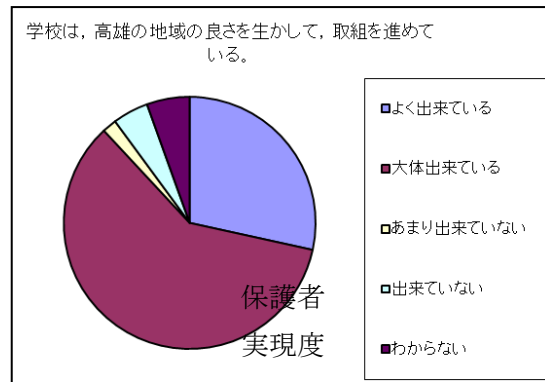


⑤ 保護者から見た学校

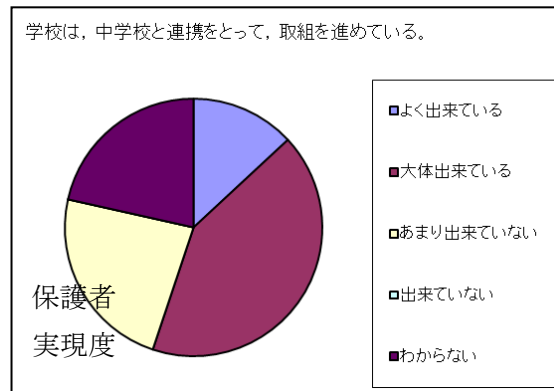
HPを通しての情報発信は、日に日に回数を増やし、閲覧数も毎回増えています。このことは、学校教育を理解していただく機会として非常にうれしいことです。しかしながら、今回のアンケートでは、「学校からの情報で、学校の子もたちの様子がよくわかる」に対して「あまりできていない」「出来ていない」「わからない」と回答している方が、25パーセントに上ります。担任からのこまめな連絡はもとより、HPや学校からの配布物などがさらにわかりやすいものになるよう工夫していくことが必要だと思えます。また、今年度より取り組みを始めたPTAメールの有効活用も考えていく必要があります。



高雄の特色を生かした教育を進めるために学習に地域を生かし、地域との関わりは大切にしようとしています。それに対して保護者からは「よくできている」28パーセント「出来ている」60パーセントとなっています。しかしながら、およそ13パーセントの「あまりできていない」「できていない」「わからない」という評価も頂いています。わたしたちは、この声を真摯に受け止め、さらに地域に根差した教育を進めていかねばならないと考えています。



小中連携の取組を保護者の目から見たら、「よくできている」「大体できている」と回答されている方が65.5パーセントです。小学校のシステムと中学校のシステムの違いや、中学校では3年生で高校進学が目にあるので、学習の質の違いもあるのですが、本来は9年間の学習は連続しています。その点で子どもたちの教育について、共通項を共有し具体化を明確にした取組を今後とも中学校と進めていかなければならないと考えています。



目指す学校像

- ① 高雄の自然・歴史・文化を教育に生かす学区
- ② 常に情報発信する学校
- ③ 一歩リードして地域・保護者と教育の喜びを共有する学校
- ④ 積極的な小中連携を目指す学校

⑥ 自由記述欄より

様々なお声をいただき、ありがとうございました。その中のごく一部ですが、皆様の声にお応えしたいと思います。

ア 登下校時の不審者への対応、通学路のトラックへの申し入れなどをできれば充実させていたきたいです。

不審者情報をつかんだ時には、必要に応じて、教師引率の下に集団下校したり、登下校の様子を見守りを強化したりしています。また、PTAメールなどを通して、保護者の皆様と情報を共有したりするように努めています。情報をしっかり確認する必要もありますので、即時に対応ということがなかなか難しいこともあります。

イ 子どもの声に耳を傾け、話を聞いてください。

これは本当に大切なことをご指摘いただいたと思います。私たちの取組の中で、子どもたちの声に耳を傾けられていないことがあるということを改めて反省しています。子どもたちがどのような思いで学習や生活に取り組んでいるのかをしっかりと聞き、取組を進めていきたいと思えます。

ウ 放課後、学校で遊べるようにしてほしい。できない理由が知りたいです。

国道162号線は交通量が多く、また、工事区間が多い幹線道路です。京北トンネルの開通に伴い交通量が増えたり、残土や廃棄物を運ぶトラックの往来が多くなったりしています。朝は、高学年の登校班長を中心にして集団登校をしており、地域委員さんに引率していただいたりすることもあります。夕方には、学年そろって集団下校するようにしています。特に、低学年は教師引率の下で下校するようにしています。また、「下校ボランティア」を保護者の皆さんにお願いして、子どもたちを見守っていただいてもいます。それらは、子どもたちが安全に登下校できるように実践されてきた取組で、他の学校とは違う取り組みの一つです。それでも、登下校の様子を見ていて、交通事故に巻き込まれないかとハラハラする場面もあります。

- 「放課後に子どもたちが遊べるようにしたい」
- 「子どもたちが学習に戸惑っていたら、放課後に個別指導したい。」
- 「子どもたちの話を放課後にじっくり聞きたい」

教職員のほうも、そのような願いを持ってはいますが、上記の実情から、なかなかできないのが現実です。保護者の皆様からもこのようなお声をいただき、私たちの取組を見つめなおすよい機会だと思っています。もちろん学校でも検討してまいります。地域の方々、保護者・PTAの方々とも相談して解決していきたいと考えています。

エ 学習面で努力しているが、身に付き自信につながるまでは難しい。

子どもたちの学習の様子を見てみると、学習した直後にはわかっているでもそれが定着しにくいという実態も見られます。今の学年の漢字は覚えていても、前の学年の漢字は書けないということも見られます。そこで、帯タイムや土曜学習などを通して、繰り返して練習できるように取組を進めています。前述の家庭学習のように、どのように学習するのかを身につけ、自分で学習できる力をつけることも、学習内容の定着を図る一つの取組になります。子どもたちはお家でどのように学習しているでしょうか。その様子をじっくり見つめなおしてみませんか。